

**「戦争と平和！」**  
第 13 回**或る戦争未亡人のこと**

平栗 彰子

信州の伊那谷は穏やかに日々が過ぎ、四季の移り変わりが鮮やかで平和な地域である。子ども頃の記憶は郷里の自然と深く関わり、近くに住む親類縁者との親密な交流の日々と共にあったが、太平洋戦争の影は深く沈んで、人々の暮らしに密かな影を落していた。

母方のさとは大きな農家で、祖父は世話好きの趣味人であったらしい。農業の傍ら花火作りが得意で、「啓さんの太白星」と呼ばれ、花火大会のトリとなる銀一色の大玉が自慢であった。祖母は 15 歳で嫁いで来て 14 人の子を産み 10 人を育て、98 歳の天寿を全うした。母の兄弟姉妹はそれぞれに幸せな家庭を営んでいたが、中でも一番下のみね叔母は気の優しい美人で、私は大好きだった。

どこの家も当時は食糧難が一番の問題で、食べ盛りの子ども 3 人を抱え、祖父母もいる 9 人家族に母たちは苦労したと思う。食い扶持を減らすために、私とすぐ下の弟は更に山奥の伯母の家に疎開した。その近くに大好きなみね叔母の家があり、そこにも厄介になった。

みね叔母の嫁ぎ先は山持ちの農家であったが、長男である叔母の夫・義治は職業軍人の陸軍少佐で、若夫婦の居室には軍服に軍刀を佩いた立派な写真が飾ってあった。舅姑、小姑も二人同居の大家族の中で、もともと大人しい叔母は気苦労の連続であったと思う。いつも涙目の顔で私たちを迎えてくれた。生まれたばかりの女の子・美佐子がいた。義治叔父の写真の前には朝晩陰膳が供えられていた。

銃後の守りは戦時中の婦女子の務めで、戦地への慰問袋のために千人針を作った。晒しの白布に赤い木綿糸でこぶを作るのだが、一人一個の針目に緊張して針を刺した。虎は千里行って千里帰るとの言い伝えにより、その奉仕に寅年の女性はたくさん針目を受け持ち大活躍した。

そんな山里の日々が一本の電話で破壊された。壁の電話が鳴り、受話器をとった祖母が義治叔父戦死の報を受け、受話器を取り落として筒型

の部分がぶら下がって揺れていた。腰に下げた皺くちやの手拭を目に当て、「義治が…義治が…」と叫ぶだけの祖母であった。1945 年 5 月のことである。戦死はミンダナオ沖とだけ知らされた。みね叔母の悲嘆は言うまでもなく、舅姑をはじめ一族が悲しみにくれた。残された娘美佐子は 2 歳になるころであった。

転進という言い換えに惑わされて、実態は知らされないまま戦況は敗退の一途をたどり、8 月を迎えた。このような悲劇は当時日本中で起こっていたと思う。ありふれた、とは言いたくないが、悲しみに対して鈍感でなければ、残った者は生きていられない、狂気の時代であった。

みね叔母のその後は、当時よくあった対処の仕方がとられた。続出する戦争未亡人の先行きを憂慮しつつも、「家」の存続を考えての辻褃あわせの姑息な手段で、小姑の義弟とのいわゆる「弟直し」であった。叔母は娘を連れて年下の夫の弟と再婚した。本当にこれでよかったのか、当事者二人の気持ちに沿って考える余裕はなかったのかと思う。生活は外見は何も変らなかったが、姉である私の母のところに来て、泣き崩れていた様子を思い出す。それは悲しみなのか諦めの涙だったのか知る由もない。新たに夫となった義弟にもお下がりの新婚生活は面白いはずがなく、挨拶にも顔を上げない様子に、子どもながら心中を押し量ったものだった。

その後は二人なりの幸せを模索したと思う。二人の子どもに恵まれ、長女を含め三人とも素直に育ったことは救いであった。叔父は 70 歳になったみね叔母を見送り、続いて鬼籍に入ったが、あの世でも叔母は申し訳なさそうな涙目で過ごしているに違いないと想像する。

**台風生る叔父終焉のミンダナオ****日に透ける鶏冠血の色敗戦忌**

私は敗戦の時、小学校 3 年生であった。

